

2年連続の九州一

中学から高校に進学しても優勝

《15～17歳の部男子》

通算7アンダー、137

丸尾 怜央(宮崎・日章学園高1年)



【15～17歳の部男子優勝の丸尾[㊦]と同女子の荒木[㊦]】

中学から高校に進学しても丸尾を強かった。昨年の12～14歳の部男子で九州チャンピオンとなり、その勢いで日本ジュニアも制した。そして、今大会も当たり前のように勝った。初日の9バーディー、2ボギー65のビッグスコアが大きな貯金。「2位とは4打差あったし、安全な方を狙っていった。風も強かったし」とセカンドではピンを狙うよりケガが少ないようにパーオンを心掛けたが、スコア的には最終日に伸びない原因となる。

敢えて「安全」を選択したために、自然とカップからの距離は遠くなる。最終日は3バーディー、3ボギーのパープレー。3つのボギーはいずれも3パット。おまけに18番ロングでは2オンしながらも3パットのパー。つまり、3パットが4度。「気持ちが出過ぎるのか、5～6mくらいから2mもオーバーして。確実に2打で決める力をつけないといけません。つい入れたくなるんです」と反省の弁ばかりが口をつく。

九州一になっても渋い表情だったが、妹・海七の12～14歳の部女子の優勝を向けられた時はさすがに相手を崩した。「兄妹での優勝は嬉しいですね。自分も頑張らないと、と思いました。(優勝を)知らされて元気が出過ぎたのか、その次のホールはボギーでした」とおどけた。

身長167cm、体重は2kg増えて72kg。ドライバーの平均飛距離は310～320ヤードを誇る。自分の成長点を「コースマネジメントが良くなり、安定したスコアが出るようになった。コンディションに合わせてやれるようになった」と分析する。

目標はでっかく「アマチュアの世界ランク1位になって、18歳でマスターズに出場する」ことだ。その前にナショナルチームのメンバー入りを目指す。それには実績が必要となる。「日本ジュニアは連覇したい。自信はあります」。この堂々さが頼もしい。

待望の九州タイトル

敗戦の悔しさバネに復活V

《15～17歳の部女子》

通算4アンダー、140

荒木 優奈(宮崎・日章学園高2年)

最終日は19ホール目での決着。通算4アンダー140で三明と並んでのプレーオフは18番ロング(506 ヤード)で行われた。荒木がピンまで残り30ヤードの第3打を58度のウエッジで1・5mにつけてバーディーを奪い、初優勝を飾った。「やっとつかみました。めっちゃ嬉しい。今日は色々ありすぎて、忙しい1日でした」と荒木は2018年、熊本・玉名中1年時以来のジュニア制覇を素直に喜んだ。

ある意味、大逆転勝利と言っていいだろう。5アンダーの首位タイでスタートしながら、前半のインはノーバーディー、4ボギーの40で優勝争いから脱落。荒木自身「前半は死んでいました。ターンした時、自分のプレーが情けなくて涙がぼろぼろ出てきて。去年のこの大会、そして今年の子アマとかぶって」と荒木は一人、トイレの中で頭を垂れた。去年の九州ジュニアは初日8アンダーで単独トップに立ちながら、最終日に逆転負け。今年の子アマでは2日目までトップタイにいながら、タイトルには届かない。ただ、今回の荒木には2度の経験がバネになる。「後半だけでもやってやろう」という開き直りが出た。気持ちの前向きさがプレーに表れ、4番でバーディーを取ると、最終9番ロング(487ヤード)では2オンに成功して右奥3mの下のフックラインを「強めに打って」イーグル。この一

打でプレーオフ進出の切符をつかんだ。

この日、行われた4部門の最後のウイナーは15～17歳の部女子の荒木。それ以前に丸尾と岡村の日章学園勢が覇者となっていた。「日章ばかりで、すごくないですか」と優勝メンバーに自分も加わってホオも緩んだ。

昨年日本ジュニアは4位タイで今年のシードを獲得。そして、九州女王として参戦する。「今年こそ優勝したい」。ナショナルチームの一員としてのプライドもある。

プレーオフ制して初優勝

昨年の3位から頂点に

《12～14歳の部男子》

通算1オーバー、145

岡村 昂汰(宮崎・日章学園中2年)



【12～14歳の部男子優勝の岡村Ⓔと同女子の丸尾Ⓔ】

12～14歳女子の部の直後に行われた同男子の部プレーオフ。1ホール目の10番ミドルはお互い譲らない。続く11番ショート(184ヤード)。岡村は第1打を4Uで左4mにつけバーディー、女子同様に2ホール目で勝負を決めた。「初めてのプレーオフで今までにない緊張感でした。足も震えました」と岡村は初優勝の瞬間を静かに振り返った。

ウイニングパット以上に心臓ドキドキだったのが、1打ビハインドの最終18番ロングでのバーディーパット。1mを沈めてプレーオフへの道を切り開いたのだが、ピンチはその2ホール前の16番ショート(202ヤード)だ。4Uでのティーショットが奥にOB。さらに5Iでの打ち直しがピン奥に乗ったものの、そこから3パットのトリプルボギー。リードを一気に吐き出し、逆に17番で並んでいた外岩戸がバーディーを決めて逆転されたのだった。

兵庫県姫路市出身。峰相小1年からゴルフを始めた。進学の際、全国各地の中学校を調べ、ゴルフ環境の整っている点で現在の日章学園中を選んだ。「行って良かった。練習量が増えました」。それぞれ異なるコースで毎週5日はハーフラウンドをこなし、朝練なども充実。古川や丸尾ら強い高校生らと一緒にラウンドし、アドバイスももらう。

日々の練習でプレーも成長。得意なクラブはドライバーで、本人がプロの稲森のように「曲がらない自信がある」と平均飛距離は270ヤード。この2日間でフェアウエーを外したのは計4度だけである。日本ジュニアは昨年に続き2度目の出場。「パーオン率を上げて、ほとんど1パットでいきたい。そして60台を出したい」。小5の時にマークした「62」(兵庫・つるやCC西宮北コース)のベストスコアを持つ岡村が東京GCでの爆発を誓う。

姉兄の背中を追って初V

初のプレーオフも普段通りにプレー

《12～14歳の部女子》

通算2オーバー、146

丸尾 海七(宮崎・赤江中2年)

兄の怜央がホールアウトする以前に妹の海七(しいな)がプレーオフを制し、九州一のタイトルを手にした。プレーオフは15～17歳の部男女のラウンドの間を縫って実施。1ホール目はともにパーで迎えた2ホール目の11番ショート(168ヤード)。5Uでのティーショットはピン奥4mに乗る。相手の中間のボギーに対し、丸尾がパーで決着がついた。「プレーオフは初めて。してみたかったけど、緊張もした。

でも、楽しかった。優勝？『やった』という感じじゃなく、もっといいプレーができたのかな、という感じです。丸尾には様々な感情が入り混じった初の体験となった。

今大会に出場している姉・鈴水(れいな、日章学園高2年)と兄・怜央の背中を見ながら、小2からゴルフを始める。今大会、兄は優勝、姉も15~17歳の部女子で18位タイとなり、日本ジュニア出場の代表権を得た。きょうだい3人で本戦出場となる。3人でよくゴルフの話をし、よく一緒に練習もする。「好きなプロとかはいません。目標は姉と兄です」と丸尾にとって最も大事な存在である。今大会も初日にパッティングの調子が悪かったのだが、その夜に兄からアドバイスを受け、最終日には修正できたという。

海七は「しいな」と呼ぶ。興味がサーフィンの父・高範さん(50)が「七つの海をまたいで活躍してほしい」と命名した。丸尾本人もその名前を気に入っている。

初めての日本ジュニア出場。「楽しんできたい。スコアが良くても内容が悪いといやなので、納得のいくプレーをしたい」。姉兄とは開催コースは異なるが、本番へ向けての心構えなどを含め、2人から様々なアドバイスをもらえるだけに強みである。



【丸尾3きょうだい。左から海七、怜央、鈴水】